
君影想

絳月葩鶴士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君影想

【Nコード】

N3445K

【作者名】

緯月葩鶴士

【あらすじ】

——この国には“神”がいて、“人間”を壊したがっている。
“神”は、“人間”の中でも、優れた能力を持つ者を選び、“兵器”にする。“兵器”になった者は、自分が壊れるまで、あるいは、自分の愛する者を壊すまで、人を壊し続ける。

兵器に選ばれた少年と、彼の愛した少女、全てを掌で操る神——

そんな人々の“想い”の詰まった物語。

（前書き）

この小説には、多少の過激な描写があります。苦手な方はご遠慮ください。

？：「覚」

太陽が昇り切り、いつもは人通りの多い町。なんだが……。

人々はいる事はあるのだが、皆、全身から――腹や胸や首や足や腕から、血を流して倒れている。町はおびただしい量の血液で紅く、そして黒く、染まっている。

聞こえるのは、人々の悲痛な悲鳴と、壊された肉塊が朽ちて逝く音だけ。

そんな悲惨な光景の中に、動くモノが二つ。

一つは“僕”。何やら酷く光る物を、その右手に持っている。もう一つは“君”。酷くおびえていて、体中が震えている。

そして、“僕”は“君”に、その切っ先を向ける。

――止めろ、やめろ、ヤメロ！！

ザシュ。

そこで目が覚めた。嫌な夢だった。額や背中から流れ出る汗が、僕の身体や心を冷やしていく。

――嗚呼、そうか。噂は本当だったのか。

僕は選ばれてしまった。“ヒト”を壊す兵器に。

？：「恐」

「この国には“神”がいて、“人間”を壊したがっている。“神”は、“人間”の中でも、優れた能力を持つ者を選び、“兵器”にする。“兵器”になった者は、自分が壊れるまで、あるいは、自分の愛する者を壊すまで、人を壊し続ける。」

ただの噂だとばかり思っていた。確かに、今の政府は国民の事なんて考えずに、自分達の利益だけを考え、国を動かしている。その

結果、厳しい税金の徴収や、法を犯した者への厳しい刑罰、及び罰金など、無茶苦茶な事ばかりしているが……。まさか本当に、そんな事をしているだなんて……。

僕の能力は“先見”。生まれつき、僕は良くない事が起こる前に夢の中でその危険を知る事が出来る。それが、“神”の奴のお気に召したのだろう。

そして、さっきの夢も、おそらく……。

——くそっ。それじゃあ僕は、“君”も壊してしまうっていうのか！？ ふざけるな！

僕はしばらくの間、空をにらみ、その場に立ち尽くしていた。

？：「信」

僕は一日中、“君”の事を考えていた。

笑った顔、怒った顔、泣いている顔、寂しそうな顔、悲しそうな顔、嬉しそうな顔。

そのどれもが愛おしく、僕にとっては、かけがえのないものだった。気が付くと、もう日は沈んでいた。急に空が見たくなって、僕はベランダに出る。

相変わらず町は明るく、車やバイクのエンジン音は煩かったが、それでも、月は美しく輝き、星は明るく煌めいていた。

——そうだよな。こんな地球でも、綺麗なモノはあるんだよな。

僕はその事を改めて実感し、そして——

どれくらい時間が経ったろうか。あれから僕は、ずっと空を見ている。

すると、すー、と尾を引いて、光が流れた。ほうき星だ。

僕はとっさに、“君”の未来を考えた。そして次に、“君”の過去に思いを馳せた。

きっと、“君”の未来に僕はいない。でも過去には、きっと僕がいる。

僕がいなくなっても、“君”は生きていける。穏やかな日々を送れる。

それだけで、充分だと思った。

？：「志」

決意は固まった。

僕は誰も壊したくない。人を傷付けたくない。その為には……

“神”を、倒すしかない。

でも多分、僕は神に勝てない。それでも、僕は行かなくてはいけない。刺し違えてもいい。

それで、“君”を、守る事が出来るなら。

——今日は早く眠ろう。明朝、出発しよう。

そう思っただけにもぐりこんだが、なかなか寝付けなかった。

——嗚呼、最期に“君”に会いたかったな。

結局、ほとんど眠れないまま、夜明けを迎える事になってしまった。

？：「出」

——仕方ない。行くか。この決意が揺らがないうちに。

僕はポケットに短剣を仕舞い込むと、飛ぶ準備を始めた。何しろ、“神”はこの国で最も天に近い場所にいる、と言われているのである。流石に、歩いては行けまい。でも、飛ぶのなんて久しぶりだ。多分、5年前に法改正されて以来だろう。本当は練習してから行きたいのだが……こんな所で捕まっている場合ではない。仕方ない。

始めよう。

5年前、ある悲惨な事件が起こった。凶暴化した動物達が、総理と、その周辺の政治家達を襲った、という物である。結局、それはある過激派のグループが、自分達で開発した独自の能力を使って、自分の身を動物に変化させて、行った事だった。

政府の——正確には、“神”のдарう——理不尽に耐えられなくなった人々の暴動。自分の身を獣に貶めてまで、果たしたかった野望。いわゆる、“革命”だった。

僕の両親は、その革命家のメンバーだった。それで僕は、父と母が僕に与えてくれたそのグループの切り札、“ジューヘンジュウニ獣変十二”という、千支の動物に好きなように変化できる能力を使う事が出来るのである。実際、これを使う事の出来た父と母は、最後まで捕まらずに、逃げおおせる事が出来た。もつとも、かなり体に負担がかかるらしく、二人とも早くに亡くなってしまったが。

まさか、“神”の奴、ここまで知ってて！？……いや、今はそんな事を考えている場合ではない。集中、集中。

——でも……やっぱり、ちゃんと返事したかったな。だって、“君”が折角、僕の一番欲しかった言葉を、言ってくれたのに。どうして僕は……。
ブーブーブー。

携帯が震えた。“君”からだった。一瞬迷ったが、一応電話に出る。

「……もしもし」

「あっ、もしもし、裕？ 私、鈴よ。ごめんね、朝早くに」

「ううん。大丈夫。それより、どうしたの？」

「あのね、その……。この前の返事なんだけど……。今日くれるって、約束したじゃない？」

——あ……。そうだった。よりもよって間が悪い。でも。どうせ、最後だからな。

僕は勇気を出して、言った。

「鈴姉、僕も、好きだよ。鈴姉の事」

「……裕ちゃん」

「だから、鈴姉はどんな事があっても、前を向いて、生きてね。それが、僕が一番嬉しい事だから」

「……裕、ちゃん？」

「ずっとずっと、これから、僕は鈴姉が大好きだよ」

「ちょ、ちよっと、裕ちゃん。どーしたの？ 突然「じゃあね、鈴」ブチ。ツーツーツー。」

——ほんと、“君”って、勘だけは良いんだから。でも、最後に言えて良かった。これで、もう思い残すことはない。行くぞ！

「印*第十条 “酉”^{トリ}解^{かい}！」

？：「昔」

“君”と僕とは、幼馴染である。“君”は僕より三つ、年上で、共働きの両親の代わりに、よく、僕の面倒を見てくれた。本当の家族のように、いつも優しく接してくれた。

だから、僕がいくら“君”の事が好きでも、“君”は僕の事なんか弟のようにしか見てくれない、そう思って、そう思い込んで、僕はせめて嫌われないように、一生懸命、“弟”を演じ続けた。いつしか、本当にそれが心地好くなってきた。もう、このままでも良いや、と思い始めるようになった。そんなある時。突然、だった。

いつものように勉強を教えてもらっていた時、不意に“君”は僕に抱きついてきた。そういう事は、割とよくある。テストで一番を取った時、とか。高校に入学出来た時、とか。でも、その時は何にも無かった。すらすらと問題が解けたとか、教わった事が出来るようになったとか、そういう事は一切無かった。それなのに——

僕は吃驚してしまって、ただ“君”に体を預けることしかできな

かった。どうせ、すぐに体を離して、いつものテンションで「じょーだん、じょーだん。ちよつと疲れただけよ！」

とか、言うものだと思っていたから。だが、その時は違った。“君”はしばらく僕を抱き続け、僕が心配になるほど時間が経ってから、おもむろにこう、呟いたのである。

「裕、好きだよ……」

その声は囁くようで、でも強い意志を感じて、兎に角、いつもの“君”の声じゃなくて、僕はただ、少し待ってほしいとしか、言えなかった。

あれが、まさかこんな形で戻ってくるだなんて、思いもしなかった。けど……これで迷いは吹っ切れた。僕は“君”を守る。その為にも――

間近に迫ってきた“神”の城の前に、僕は一層神経を張り詰めさせた。

？：「挑」

「封！」

――はあ。ようやく着いた。思ったより上手く飛べた。でも……思ったより広いな。

さて、“神”は何処にいるのだろうか？

「誰をお探しかな？ カミジヨウ 上篠 ユウ 裕君」

――っ！？ 自ら登場かよ。

声のした方に目を向けると、そこには“神”がいた。僕は“神”を見た事は無いけれど、でも、こいつが“神”だ。間違いない。そう思わせるオーラがあった。

「こんにちは。“神”様。初めまして」

「いやいや。君の活躍、ココで拝見させてもらっているよ。で？

遠路遙々、今日は何をしに来たのかな？」

“神”は全てお見通しのようだ。わざわざ僕の目の前までやってきて、両手を広げて見せやがった。お望みとあらば、と僕は深く息を吸い込む。そして――

「“神”、覚悟！」

僕は“神”の左胸に、持ってきた短剣を突き刺した。
ブシュ。

やった、と思った。それなのに……。

「残念だったねー」

確かに、短剣は刺さっている。血も出ている。それなのに、奴は死なない。それどころか、はっはっはー、と高らかに笑っている。こいつ……化け物か？

「さあて、では上篠裕君。私の下で存分に働きなさい。その前に――それまで笑っていた顔を一変させ、鬼の形相で、奴は叫んだ。

「自分の罪を贖え！！」

？：「墮」

“神”が叫んだ瞬間、どこからか穴が開いて、僕は下へ下へと落ちて行つた。落ちる毎に、闇は深さを増し、僕を飲み込んでいく。どのくらいの時間堕ちたのだろうか？気が付いたら、また“神”が目の前にいた。

不思議な事に、もう殺意は湧かない。というより、何の感情も湧いてこなかった。

「償いは済んだようだね。では、こちらに来なさい。“裕”」
「はい。」

「くくく、良い子だ。もうすぐ、もうすぐその力が私の物に」

――アレ……？ どうして僕はあんな奴の言う事を素直に聞いているんだ？ ……思い出せ、思い出すんだ……。僕が誰で、何の為にここに来たのか……。

「では、始めるよ。兵器番号348、“裕”。能力“先見”“獣変^{ジュマン}”
十二”」

——僕は……。そう、上篠裕だ。そうだ。僕は“神”を倒す為に
ここへ……。

「……想い人、“河曲^{カワノ} 鈴^{リン}”。装備には……：そうだなあ。“剣”を
与える」

——“神”になんか負けてたまるかつ！僕は“君”を守るんだ！
「うおおおおおおおー！！」

「もう遅いわ！“縛^{バク}”＊絶対服従、“命”＊全てを壊せ！」
シューウウウウウウ。

「了解シマシタ。我が主、“神”」

コウシテ、僕八兵器二ナツタ。

？：「動」

僕八全テヲ壊シテイク。ソレガ僕ノ任務。
ガシユ、ザシャ、グチャ、グシャ、ドシャ。

コノ剣八不思議ナ事ニ、イクラ切ツテモ、イクラ血や脂ニマミレ
ヨウトモ、人ヲ斬ル事が出来ル。者ヲ壊ス事が出来ル。

頭、腕、足。切り落トセル物ハスグニ斬リ落トシ

眼、心臓、肺、肝臓、腎臓、脾臓、臍臓、腸。取り出セル物ハ全
テ決リ出ス。

サクツ、ビチャ、ジャクツ。

僕八壊シ続ケル。僕ガ壊レルソノ日マデ。
君ガ壊レル、ソノ日マデ。

「裕ちゃん！」

誰カニ呼バレタ。マダ生キテイル者ガイタノカ。僕八躊躇イ無ク、
剣ヲ彼女ニ向ケル。

僕ト同ジク、赤黒ク染マッタソレヲ振り下ロス。

ヒュッ、ザシュッ、グチュ、ビチャ。

「裕、私、も……だ、い、す……き……よ……」

僕ノ頬ヲ雨ガ濡ラス。僕ハソレヲフク事モナク、タダ立ち尽くシ
テイル。

「……リン、りん、鈴……!」

正氣に戻った時にはもう、“君”は肉塊と化していた。
ただその顔だけは、いつもと変わらず、笑っていた。

?:「祈」

“君”の墓の前に、今僕は立っている。

“君”が好きだと言っていた、“君”の名が入った花を持って、
立っている。

「鈴、ごめんね。……ありがとう。」

——こんな僕を愛してくれて。こんな僕を命を懸けて、救ってく
れて。でも……

「鈴が生きていてくれた方が、僕にとっては、よっぽど良かったよ」

見晴らしの良い丘。ここなら、誰にも迷惑は掛からないだろう。

町は少しずつ、落ち着きを取り戻しつつある。“神”が倒れたから
だ。

やはり、僕の刺した短剣は、しっかりと“神”の心臓に届いていた
らしい。

それでも、3日生き延びたというのだから、ものすごい生命力だと
思う。ホント、何者?

まあ、これで、僕の役目は終わった。

それで、僕の罪が消える事なんて無いんだけど、それでも、将
来の子供達に希望ぐらいは残せたかな?

なんて、犯罪者の言う台詞じゃないよね。ちょっと格好付け過ぎ
たかな?

さて、ではそろそろいこうか。

——僕のような悲しい兵器は、二度と生まれませんように。

ブシュ

僕の壊した人達よ、せめて、夢の中では安らかに。

（後書き）

緯月葩鶴士、初投稿作品です。

を、諸事情ありまして修正させていただきました。

この作品は僕には珍しく、若干バッドエンドです。

それでも、大事にしてきた作品です。

ではでは、また別の作品でお会いできる事を祈りつつ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3445k/>

君影想

2011年10月6日22時50分発行